

中国の染織意匠と日本

—伝徳川頼宣所用の陣羽織について—

黄 韻如

はじめに

和歌山市和歌の浦の紀州東照宮に、徳川頼宣（1602－1671）が大坂の陣の折に着用したと伝えられる「紅地金入繡珍桃文様陣羽織」（図1）がある。頼宣は徳川家康の十男であり、大坂夏の陣に参加した時14歳であった。この戦いの様子は「大坂夏の陣図屏風」により克明に伝えられている。戦に赴く折に着た陣羽織は、武士が陣中で威容を整えるために具足の上にはおった外被である。この陣羽織について、神谷栄子氏は次のように解説している¹。

裂地は明製の舶載品と思われる金入繡珍……（略）……文様は、頂に金糸であらわされた丸文を持つ桃の折枝が、配色を巧妙に変えて互の目に置かれている。……（略）……二つ巴文風の丸文は、恐らく中国の瑞文であろう。金糸で織り出されたその瑞文と長寿を表象する桃文とを組み合わせた中国の吉祥文様と考えてよいであろう。桃の折枝には、生気に溢れた伸びやかな葉蔭に、花と蕾が実と同様の側面からの文様で愛らしく生き生きと付されている。そしてその大らかな桃の実には、何と、相当量の虫喰いのあとが巧みな便化で面白く表現されている。逞しく育って見事に成人し、泰然と世に処して事を成し、長寿を全うするといった吉祥文様の意味がこの陣羽織の裂地を通して窺われるようである。

この陣羽織に関しては、基本資料の解説以外ほとんど研究の蓄積がない。そこで本稿ではまず陣羽織の文様に関する神谷氏の説明の妥当性について検討した。結果、神谷氏の考察は概ね妥当と言えるものの、陣羽織が明代の裂地であることの裏付けに乏しい部分がある。そこでこの部分の説明を補足すべく、中国の文様との比較を行い、桃文様の表現を検討した。加えて、桃意匠の舶載裂を陣羽織に仕立てたことの意味に対して、日本での桃の受容過程を踏まえつつ考察した。

なお、日本語の「桃」は桃の木、花、実を意味しているが、本稿では桃文様は桃の実を指していることをお断りしておく。

一．陣羽織の文様

1．中国の桃文様と西王母

中国では桃は縁起のよい果実とされている。それについては、文化史・民俗史の視点から多く論じられてきており、小南一郎氏や王秀文氏の研究によって明らかにされている²。中国古代では、桃は美しい女性に喩える果実として詠まれている歌に有名な『詩経』の「桃夭」³がある。その一方、桃は霊力のある植物とも見なされている。『周礼』には桃の木や枝が不祥の邪気を払う力があると信じられていた⁴。

後漢時代になると、桃は西王母と結びついて語られるようになる。晋代に成立とされる『博物志』には西王母が武帝を訪れた場面が次のように描かれている。

西王母索七桃、大如弹丸、以五枚與帝、母食二枚、帝食桃、輒以核留膝前、母曰取此核將何為、帝曰此桃甘美欲種之、母笑曰此桃三千年生一実。……（中略）……時東方朔竊從殿朱鳥牖中窺母、母顧之、謂帝曰、此窺牖小兒、嘗三來盜吾此桃、帝乃大怪之、由此世人謂方朔神仙也⁵。

西王母が武帝に与えた桃は仙界でしか栽培できない、三千年に一度実をつける大きな桃で、東方朔は三度も桃を盗み食べたことによって、一万年八千年も生きられる仙人となったとあり、桃が長寿をもたらす仙果と見做されている。

この物語は文学、絵画、刺繍、陶芸などの題材となつて、大変好まれている。たとえば、徽宗の印が刺繍されている「緙絲蟠桃献寿図軸」（台湾故宮博物院蔵・図2）は、掛軸の中に細長く湾曲した葉と三つの実をつけた桃の枝が綴織であらわされ、上部に「蟠桃一熟九千年、方朔偷来献寿筵、讒入齒牙甜勝蜜、頓教凡骨變成僊」という詩が刺繍されている。

蟠桃とは、李時珍『本草綱目』に「楊維禎宋濂溪集中、並載元朝御庫蟠桃、核大如盃、以為神異⁶。」とあり、かつて元代の宮廷の庫にあり、碗のように大きな核で、俗世間のものとは思えない桃という。掛け軸に薄い黄色とオレンジの色糸で刺繍された桃の実は、まさしく仙界の大いなる桃・蟠桃である。

『大平広記』所収の『墉城集仙録』（五代・杜光庭）に次のようにあり、西王母は金母ともいい、仙界の中

で最高位の女神と称えられている。

西王母者、九靈太妙龜山金母也。一號太虛九光龜台金母元君、乃西華之至妙、洞陰之極尊。……（中略）……柔順之本、為極陰之元、位配西方、母養群品。天上天下、三界十方、女子之登仙得道者、咸所隸焉⁷。

西王母は次第に道教の神として取り入れられ、信仰されてきた。元・明代になると、桃は仙果のイメージが強まり、仙人とが共に描かれる意匠が多くなる。これは道教思想の流行を背景に持つと考えられる。当時の美術工芸品にも多数意匠化されている。例えば、明代の刺繍作品「顧繡八仙慶寿掛屏」（台湾故宮博物院蔵・図3）、仙人たちが揃って王母の誕生日を祝う場面を描いた「緋絲瑤池集慶図軸」（明代・私人蔵）がある。さらに、明代の嘉靖末年（1522–66年）に宰相嚴嵩の財産目録である『天水冰山録』⁸には、「金王母蟠桃大盃」、「金羣八仙捧寿大珍寶首飾」、「玉洞仙桃」といった工芸品・書画・刺繍作品に、桃、西王母、仙人などに組合せた意匠と思われる品目が多く見られ、大変好まれていたことが窺われる。

2. 服飾にみる桃文様

中国の服飾における桃文様の実物遺品は多くなく、現在確認できたものとしては萬曆皇帝と孝端皇后・孝靖皇后の墓である定陵の副葬品がある。定陵では各種の服飾品や反物など染織品が六百件余りあり、そのなかに桃文様が見出される。定陵に関する一連の出版物⁹から確認できた桃文様は以下の十数点であり、以下に定陵の出土品の桃文様の例を挙げる¹⁰。

まず、萬曆皇帝の遺品は「氈靴」、「紅寿桃紋地織金萬寿福喜緞緯絲八團龍聖卍寿無疆交領夾龍袍」、「淺黃暗花雲鶴仙桃綾大袖襯道袍」（図4）があり、孝端皇后の遺品は「紅肩通袖柿蒂鶴鹿同春群仙祝寿織金妝花綴方領女夾衣」、「紅雲鶴紋織金卍寿字地織金妝花龍欄仕女欄綴裾」、「黃靈芝寿桃紋綢」、「緑曲水地寿桃紋綢圓領女絲綿襖」、「黃折枝寿桃萬寿紋改機繡龍方補女夾衣」（図5）、「緑卍寿字寿桃紋綢立領女絲綿襖」があり、孝靖皇后の遺品は「緑卍字地折枝花果亮花綢立領女夾衣」、「緑串枝桃花寿桃托寿字改機方領女夾衣」（図6）、「紅織金寿字寿桃暗花羅繡龍方補方領女衣」、「緑靈芝捧卍寿字折枝花卉改機圓領女夾衣」がある。

これらの染織品は材質は様々だが、桃花の折枝と桃の実と「卍」、「寿」、「福」、「喜」などの吉祥文字とを組合せた文様である。これら、萬曆皇帝の周辺の副葬品は前述した陣羽織とほぼ同時代の染織品ということで、注目に値すると思われる。

3. 二つ巴文風の丸文

陣羽織に桃文様と組み合わせられた文様は、神谷氏が二つ巴文風の丸文と説明した。日本の実例は、ほかに名物裂や表装裂に見出されるが、極めて少ない。中国ではこの丸紋は僅かながら萬曆帝の副葬品にも見られ、名称は「無極紋」、「陰陽魚」、「太極紋」などと言われ、定かではない。この丸文について、筆者は現時点では太極図から変化した一文様であり、本来無限を示す図案に寿の吉祥性が加えると推測した¹¹。ただし、日本ではこの文様に対する認識が低く、理解と受容の進展は見られなかった。

以上のように、この陣羽織の桃文様は、桃の実は、花と葉とが同時に表わされており、また桃の斑点は、実が熟するまでに長い年月を要する表現と見做されることから、西王母に因む仙果と思われる。そして、文様の全体は、蟠桃に金糸の瑞祥の丸文が加えられ、長寿の吉祥文様となる。

この陣羽織は、文様の表現が萬曆帝の副葬染織品と類似性が高いことから、恐らく明末の宮廷の献上物に近いと思われる。

二. 日本の桃文様

では、中国における長寿のシンボルとなる桃意匠は日本ではどのように考えられてきたのだろうか。日本では桜や藤などの花と比べると桃をモチーフとした文様が少ないとされ、またこの文様に関する先行研究はほとんど無いのが実情である。今回確認しえたものとしては、秀吉所用とされる、桃を載せる皿を捧げ持つ西王母が背板に意匠化されている「西王母蒔絵交椅」（高台寺蔵・図7）、桃樹と人物が側面にあらわされる「魚藻沈金手箱」¹²（秋田県立博物館蔵）、料紙の下絵に桃の実が描かれた「豊臣秀頼と歌懷紙」がある。また、中世末期の武将が使用した桃の形を象った兜、臺股に桃の彫刻が施された西本願寺の北能舞台（図8）と北野天満宮の拝殿、また桃山時代作の織部陶磁器に見られる。

服飾では本稿で取り上げた陣羽織のほか、江戸時代の「浅葱地檜垣桃模様狩衣」（藤田美術館蔵・図9）、婚礼衣装と言われる「赤地西王母模様小袖」（洛東遺芳館蔵・図10）がある。

これまで、日本では桃の文様が少ないといわれながらも、特に室町後期から江戸前期にかけては比較的多くの事例を確認することができた。

1. 鬼払いの桃

『古事記』には桃に関連する有名な話が記されている。

其の八はしらの雷神に、千五百の黄泉軍を副へて

追はしめき。爾に御佩せる十拳剣を抜きて、後手に布伎都都逃げ来るを、猶追ひて、黄泉比良坂の坂本に到りし時、其の坂本に在る桃子三箇を取りて、待ち撃てば、悉に逃げ返りき¹³。

伊耶那岐の尊が黄泉国から逃げ帰った際、追ってきた鬼に向って身につけていたものを投げても効果がなかったのに、桃を投げつけたところ鬼を退散させたことが出来たという。

時代が下ると、鬼退治で有名な桃太郎の伝説が見られ、そこに桃が大きな役割を果たしている。「桃太郎噺」は、室町末期から江戸初期にかけて成立したと言われる¹⁴。桃太郎は初期の物語では、桃を食べて若返りした夫婦から生まれたのに対して、現在一般的に知られているのは、桃から生まれたというものであるが、いずれにしても桃が特別な力を持っていることに変りはない。

2. 謡曲「西王母」

中世末期に作られたとされる謡曲「西王母」も西王母に因む桃の受容を促したのではないだろうか。西本願寺に所蔵されている『天文寛永間謡初之記』¹⁵から、天文18（1549）年に謡曲「西王母」が上演されていたことは確かである。西王母と漢武帝の間の仙桃授受の物語に基づいて、脚色したものであり、周の穆王の仁政を称えて西王母が天降り、三千年に一度花が咲き実を結ぶという長寿の仙桃を捧げ、舞を舞うといった筋で、めでたい曲柄である。演能記録を調査した資料『江戸初期能番組七種』¹⁶によると、謡曲西王母は、文禄3（1595）年10月8日に秀吉を招待して上杉景勝が主催した能に上演されている。

前掲の秀吉所用蒔絵の交椅に見られる桃を捧げ持つ西王母の意匠、仙人の和歌を詠んだ秀頼の懷紙の下絵の桃の図、西本願寺北能舞台の桃の彫刻などは豊富な桃の実と桃花の折枝の表現であり、見る人に西王母の三千年の桃を連想させたと思われる。

3. 名物裂にみる桃文様

日本では長い間珍重されてきた名物裂にも桃文様が確認でき、それは「卍繋ぎ地に桃果文様繡珍」（図11）のようなものである。『名物織物目録』¹⁷に次のような記録が残される。

上代 一、西王母 三百年余 金壹枚より拾両
地色もも色 紋桃ノ折枝 桃ヨリ金 葉モヘギ黒糸 大サ二寸バカリ

この記録は「卍繋ぎ地に桃果文様繡珍」の文様に近いと思われる。この繡珍の桃文様は撚金糸ではなく平金糸で織り出されるが、いずれにしても当時桃文様の裂地は西王母と命名されたことから、長寿の吉祥性を

連想する人々の理解が窺える。

前述した江戸後期の「赤地西王母模様小袖」は鹿の子絞りの亀甲繋ぎ地に桃花と実の折枝が刺繍された意匠である。これらは桃の花、葉、実を一緒に表して、西王母との関りは示されるが、中国の大いなる桃にみられた班点はない。日本の場合は西王母の桃であっても、あくまでも自然な表現が採られていると考えられる。

結び

伝頼宣所用の陣羽織に見られる桃文様について、神谷氏が虫喰いと説明した桃の実の表現は、三千年の長い歳月をかけて一度なるという大いなる桃、西王母の蟠桃の表現と考えられる。また二つ巴文風と称される丸文は、太極図から派生した文様と推測され、萬暦皇帝の宮廷好みの吉祥文様の一つではないかと考えられる。そして、大いなる桃・蟠桃と無極文が組み合わされた伝頼宣所用の陣羽織は、明末宮廷の好みが反映された文様と思われる。それによって、桃の実に花と葉が添えられ、桃に大きな斑点が表現される文様の特徴とそれに組み合わされた無極文からすると、舶載裂と判断してもよいと思われる。

桃の文様が意匠化された舶来裂を少年の陣羽織として仕立てるのは、指摘されたように西王母に因む長寿の吉祥性が考えられる。しかし、桃の実を象った兜と同じように、戦場の晴れ着としての陣羽織の性質を考えると、華美な舶載裂で武士の威厳を示すと同時に、桃の文様に靈力の加護と敵の退治を願う武士の気持ちが込められているのではないだろうか。

（付記）本稿は拙稿『『伝徳川頼宣所用陣羽織』の文様について—中国と日本における桃文様の受容を通して』（『服飾美学』46号、2008年）をもとに、加筆・再構成したものである。

注

- 1 神谷栄子「新資料紀州東照宮の服飾類—紀州東照宮服飾類調査報告一・中一」（『美術研究』第310号、東京国立文化財研究所、1979年、203—217頁）。そのほか、陣羽織に関する同氏の解説は、「紅地金入繡珍桃文様陣羽織」（『国華』1018号、国華社、1978年、213頁）、『紀州東照宮の染織品』（芸艸堂、1980年、15—16頁）、『紀州東照宮の名宝』（和歌山県立博物館、1989年、25頁）を参照した。
- 2 小南一郎「桃の傳説」（『東方学報』72号、京都大学人文科学研究所、2000年）、王秀文『桃の民俗誌』（朋友書

- 店、2003年）。
- 3 『詩経』「桃夭」に「桃之夭夭、灼灼其華、之子于歸、宜其室家。桃之夭夭、有其實、之子于歸、宜其家室。桃之夭夭、其葉蓁蓁、之子于歸、宜其家人。」とある。石川忠久『詩経』上（明治書院、1997年）。
- 4 『周礼』「夏官」の条に「賛牛耳桃茹」とあり、それについての鄭玄の注によれば、「桃鬼所畏也。茹、苕芾、所以掃不祥」となる。『周礼』（四部叢刊初編縮本、台湾商務印書館、1967年）157頁。
- 5 張華『博物志』（『百部叢書集成』38之2、藝文印書館、1968年）。
- 6 李時珍『本草綱目』巻29「果部」（国学基本叢書四百種145、台湾商務印書館、1968年）46頁。
- 7 李昉等編『太平広記』巻56（人民文学出版社、1958年）344頁。
- 8 『天水冰山録』（清鮑廷博校刊、知不足齋叢書巻6、興中書局）。
- 9 中国社会科学院考古研究所・定陵博物館・北京市文物工作隊編『定陵掇英』（文物出版社、1989年）、同『定陵上下』（文物出版社、1990年）、王岩編『萬曆帝后的衣櫥—明定陵絲織集錦』（東大図書〔台北〕、1995年）。
- 10 染織品の名称と文様の解釈及び図版は、前掲注9、王岩『萬曆帝后的衣櫥—明定陵絲織集錦』による。
- 11 拙稿「明末における服飾文様『無極紋』についての一考察」（『服飾美学』47号、2008年10月）を参照した。
- 12 手箱の制作年代の下限は慶長6（1701）年と指摘される。宮本泰雄氏の解説によると、蓋の裏に「慶長六丑年」という墨書がある（『秋田の有形文化財』秋田県教育委員会編、2001年）。
- 13 倉野憲司校注『古事記・祝詞』（日本古典文学大系1、岩波書店、1958年）64—67頁。
- 14 滑川道夫『桃太郎像の変容』（東京書籍、1981年）。
- 15 籠谷真智子「史料紹介『天文寛永間謡初之記』（『史窓』通号53、京都女子大学史学会、1996年）。
- 16 表章氏他編『江戸初期能番組七種』（『能楽研究』18・19号、1994—95年）。
- 17 鈴木一『名物裂事典』（鈴木時代研究所、2007年）45頁。